〈青森県史〉の窓 42

民主化のモデル〝青森県立図書館〟

中園　裕
（県民生活文化課　県史編さんグループ　主査）

青森県立図書館は昭和天皇の即位大典記念事業に基づいて計画され、1928（昭和3）年9月1日に開館している。そのため2008（平成20）年で80周年となる。開館時の場所は現在の県庁北棟付近で、建物は旧東津軽郡役所を改築したものだった。ところが戦前の図書館は、太平洋戦争敗戦直前の青森大空襲により書庫を1つだけ残して焼失し、休館に追い込まれてしまう。

1946（昭和21）年2月、県立図書館は県庁会計課隣室で開館。10月に木造平屋建ての小さな仮館舎へ移動する。場所は現県庁議会棟の東側付近で、当初の蔵書数は165冊！そのような劣悪な状況でも、戦時下の統制と抑圧から解放された県民が連日のように図書館へ押し寄せた。ところが同年11月24日の県庁火災で、図書館裏にあった書庫に火が移り蔵書類は全焼してしまう。

書庫内の蔵書を失い、小さな平屋建ての仮館舎では図書館としての機能を果たせない。そのため本館建設を望む声が高まり、いよいよ新しい図書館が着工となった。ところが一向に建物が建たず、建設現場には浮浪児などが住み着いて問題となった。これは当時県税の重要な財源だったりんご税が廃止され、県財政が逼迫していたからである。図書館の命運にりんごが関係していたところも青森県らしい現象といえよう。

本館が建設されるまで、仮館時代の図書館を機能的に補充したのが、移動図書館「はと号」である。図書館の職員たちは図書館に通えない遠方各地の県民のため、ワゴン自動車で図書や資料を提供し続けた。戦時中、満足に活字を見られなかった県民にとって、「はと号」は貴重な娯楽施設として歓迎されたのである。

1953（昭28）年6月8日、県立図書館は1階が完成した段階で業務を開始した。図書館の開館を待ち切れない県民へ配慮したのだろう。2階以上が増設されて全館竣工するのは翌年の9月13日であった。

完成した県立図書館で特筆すべき存在は講堂である。空襲のため青森市内には文化的施設がなかった。唯一の施設だった青森市公会堂は進駐軍に接収されている。そのため講堂は音楽会やダンス、映画鑑賞や演劇、時にはファッションショーなどにも活用された。県庁の議会棟を新設する際には、議場の代わりとなり政争の場にもなっている。

その後、青森市内にも集会機能をもった施設が建てられ、図書館利用者も増加する。それに伴い閲覧室は手狭となり、閲覧室の拡張を望む声が高まった。こうして1972（昭和47）年3月、県民の思い出を詰め込んだ講堂は大閲覧室へと改築され、その使命を終えるのである。

青森県立図書館は、図書館機能・美術館的展示機能・県民文化発展の集会機能の3つを兼ね備えた民主的図書館といわれた。当時、民主化のモデル図書館として、全国でも有名だったという。青森県の戦後文化は、青森県立図書館抜きには語れないのである。

県庁の議会棟から見た戦後の青森県立図書館
（1963（昭和38）年5月18日　県史編さんグループ所蔵）